

## 編集後記

毎年、お雛さまを飾る頃になると、定規のような笏(しゃく)を持った男雛と円形の扇を持った女雛を左右どちら側に置くか、迷った経験のある方もおられると思います。今では、内裏から見て、右側に男雛、左側に女雛を並べるのが一般的ですが、昔は逆で、京と江戸でも異なったそうです。

元々中国では、南に向かって、太陽の出る方が左、沈む方が右と定められていました。このため太極拳の型も、南向きを正面とした姿勢から開始し、左側へ進む場合は東へ、右へ進む場合は西へといった具合に、動く方向を説明したテキストもあります。

日本でも東は左を、西は右を示すことになっていて、古くから神事として行われ皇室との関係が深い相撲で、天覧席から見て左側から登場する力士が東方、右側から登場する力士が西方と呼ばれます。ところが、番付表を見ると、右側に書いてある力士名が東方、左側の力士名が西方になっています。また、大相撲のアナウンスを聞いていると、東方力士から読み上げるとき、西方力士から読み上げるときがあります。東方同士の場合は、番付上位の力士が東方、下位の方が西方に回り、西方同士で取り組む場合は、番付上位の方が西方、下位の方が東方になって、奇数日には東方力士から、偶数日には西方力士から読み上げられるということですから、何ともややこしいものです。

京都では、東半分を左京、西半分を右京と呼んで、京都御所(紫宸殿)の前には、左近の桜と右近の橋が植えられています。これも南を向いて座る天子から眺めた光景であって、観賞に訪れた人達の方から見ると左と右が逆になって、右側に桜、左側に橋が位置することになるわけです。

こうして何事も、見方を変えれば状況も一転します。中国語で「左右(ズオヨウ)」は、「～くらい・～前後」といった意味で、「おおよそ」のことを示します。例えば、「十点左右」と言えば「10時頃」

になります。

今回の支部研修交流会では、前後、左右への歩行練習やグループごとに分かれた演舞を見学する機会があったので、基本に戻ってみることの大切さを痛感したと好評でした。昨年も、多くの方々がそれぞれの階位を授与されたこと、深く敬意を表します。最初の頃は何となく難しそうで、“右も左もわからなかった”太極拳も、経験を積むにつれて、次第に面白さと奥行きが実感されてくることでしょう。あまり型や動作にとらわれて“右往左往”したり、“右顧左眄(うごさべん)”することなく、“左右・大体これくらい”といったおおらかな気分で、“調子よく、いい・加減に”、のびのびと稽古を長続させた方が、健康的な太極拳を楽しめるのではないかと思います。

最近、各教室の様子等々多くのご投稿が寄せられるようになり、厚く感謝申し上げますとともに、スタッフ一同嬉しい悲鳴をあげながら編集した本号をお届けします。今後共、太極拳以外のことでも結構ですから、グルメやパワースポット等の極秘?情報も含めて幅広く、ご提供下さるようお願いしております。

支部ホームページの方もお開き下さいますよう、よろしく……。

(中島 記)

